

岡本一平論

——親の前で祈祷

岡本かの子

青空文庫

「あなたのお宅の御主人は、面白い画をお描きになりますね。嚙おうちのなかも、いつもおにぎやかで面白くいらつしやいませう。」

この様なことを私に向つて云う人が時々あります。

そんな時私は、

「ええ、いいえ、それでもありませんけど。」などと表面、あいまいな返事をして置きますが、心のなかでは、何だかその人が、大変見当違いなことを云つて居る様な気がします。もちろん、私の家にも面白い時も賑やかな折も随分あるにはあります。

けれど、主人一平氏は家庭に於て、平常、大方無口で、沈

鬱^つな顔をして居ます。この沈鬱は氏が生^{せい}来^{らい}持^ちつ現世^{げんせい}に對する
虚無思想からだ、と氏はいつも申します。

以前、この氏の虚無思想は、氏の無頼^{ぶらい}な遊蕩^{ゆうとう}的生活となつて
表われ、それに伴つて氏はかなり利己的でもありました。

それゆえに氏は、親同胞にも見放され、妻にも愛の叛逆^{くわだ}を企て
られ、随分、苦^{にが}い辛^{つら}い目のかぎりを見ました。

その頃の氏の愛読書は、三馬^{さんば}や緑雨^{りよくう}のものが主で、其他^{その}独歩^{どつぽ}
とか漱石^{そうせき}石氏とかのものも読んで居た様です。

酒をのむにしても、一^{いっ}升^{しよう}以上、煙草^{たばこ}を喫^すえば、一日^{いちにち}に刺戟^{しげき}
の強い巻煙草^{まきたばこ}の箱を三つ四つも明けるといふ風^{ふう}で、凡^{すべ}て、徹底^{てきてい}
的に嗜好^{しこう}物^{ぶつ}などにも耽^{おぼ}れて行くといふ方^{かた}でした。

食しょく味みなども、下町式の粹いを好むと同時に、また無茶むちやな悪食あくじき、
 間食かんしょく家かでもありました。

仕事は、昼ひるよりも夜よるに捗はかどるらしく、徹夜てつやなどは殆ほとんど毎夜まいや続ついた
 位くらいです。昼ひるは大方おおかた眠ねるか外出いして居いるかでした。

しかしそうした放埒ほうらつな、利己り的な生活せいかつのなかにも、氏うぢには愛あい
 すべき善良じやうじやうさがあり、尊敬そんけいすべき或ある品位びんが認めたれました。

四五年しごねん以来いらい、氏うぢはすっかり、宗教しゆきやうの信仰者しんぎやうになつてしまいまし
 た。

始めは、熱心ねっしんなキリスト教きりすときやう信者しん者しやでした。しかし、氏うぢはトルスト
 イなどの感化かんかから、教会きやうや牧師ぼくしというものに、接近せつはしませんで
 した。氏うぢは、一度いちど信しんずるや、自分じぶんの本業ほんぎやうなどは忘れて、只ひたすら管くだ深ふか

く、その方へ這入^{はい}つて行きました。氏の愛読書は、聖書と、東西の聖者の著書や、宗教的文学書と変^{かわ}りました。同時にあれほどの大酒^{おおさけ}も、喫煙もすっかりやめて、氏の遊蕩^{ゆうとう}無頼^{ぶらい}な生活は、日夜^{きしゅう}祈祷の生活と激変してしまいました。

その頃の氏の態度は、丁度^{ちやうどう}生れて始めて、自分の人生の上に、一大宝^{ほうぎよく}玉でも見付け出した様な無上の歡喜^{かんき}に熱狂して居ました。キリストの名を親しい友か兄の様に呼び、なつかしんで居ました。或時^{ある}長い間往來^{おうらい}の杜絶^{とだ}えて居た両親の家に行き、突然^{ひざまず}跪いて、大真面目^{まじめ}に両親の前で祈祷したりして、両親を却^{かえ}つて驚かしたこともありました。また誰かに貰^{もら}つて来たローマ旧^{カトリック}教の僧の首に掛^かけ古された様な連珠^{れんじゆ}に十字架上のキリストの像の小

さなブロンズの懸かかつたのを肌へ着けたりして居ました。

氏の無邪気な利己主義が、痛ましい程ほど愛他的傾向になり初めま
した。

やがて、氏は大乗だいじょう 仏教をも、味覚しました、茲ここにもまた、
氏の歡喜的飛躍ひやくいちじの著るしさを見ました。その後とて、決してキリ
スト教から遠とおざかろうとはしませんけれど、氏の元がんらい来が、キリス
ト教より、仏教の道たどを辿るに適して居ないかと思われる程、近頃
の氏の仏教修業しゆぎようが、いかにも氏に相応ふさわしく見受けられます。

氏は毎朝、六時に起きて、家族と共に朝飯前に、静座せいざして聖書
とぶつてん典の研究を交かわる交かわるいたして居おります。

氏は、キリスト教も仏教も、極度の真理は同じだとの主張を持

つて居ります。随したがつて二重つかに仕えるという觀念もないのであります。ただ、目下もつかは、キリスト教に対しては、その教理をやや研究的に、仏教には殆ど陶酔ほとんとうすい的状态に見うけられます。

現在きよむに対する虚無の思想は、今尚いまなお氏を去りません。然しかし、氏は信仰を得て「永遠の生命」に対する希望を持つ様ようになりました。氏の表面は一層沈潜ちんせんしましたが、底に光こうみよう明を宿して居いる為か、氏の顔には年と共に温和な、平静な相が拡ひろがる様に見うけられます。暴食の癖くせなども殆ど失ほとんうせたせいか、健康もずっと増し、二十貫目かんめ近い体よねりゆうに米よねりゆう琉ひるたんぜんの昼丹前むぞうさを無造作むぞうさに着て、日向ひなたの椽えんなどに小さい眼をおとなしくしばたいて居る所などの氏は丁度ちようど象かなどの様に見えます。この容態ようたいで氏は、家庭おいかに於て家

人の些末な感情などから超然として、自分の室にたてこもり勝ちであります。その室は、毎朝氏の掃除にはなりません。書籍や、作りかけの仕事などが、雑然混然として居て一寸足の踏み所も無い様です。一隅には、座蒲団を何枚も折りかさねた側に香立てを据えた座禅場があります。壁間には、鳥羽僧正の漫画を仕立てた長い和装の額が五枚程かけ連ねてあります。氏は近頃漫画として鳥羽僧正の画をひどく愛好して居る様です。

画などに対しても、氏は画面そのものを愛すると同時に、その画家の伝記を知るということを非常に急ぎます。近頃の氏の傾向としては、西洋の宗教画家や東洋の高僧の遺墨などを当然愛好します。それも明るい貴族的なラファエルよりも、素朴な単純なミ

レーを好み、りち理智的に円満なダビンチよりも、悲哀と破綻はたんに終つたアンゼロを愛するという具合です。

近代の人ではアンリー・ルツソーの画を座右ざゆうにして居います。元が来んらい氏は、他に対して非常な寛容かんようを持つて居る方です。それは、時に他をいい気にならしめる傾向にさえなるのではないかとあやぶまれます。

たとえば、

「あなたが先日あの方にあげた品ですね、あれをあの方は、こんな粗末そまつなものを貰もらつたつて何にもなりやしないつて蔭かげぐち口くち云いつてましたよ。」などと告つげる第三者があるとします。

この場合氏は、

「折角せつかくやったのに失礼な。」

などとは云わずに、

「そうかい。いや、今度はひとつ、あいつの気に入る様ようなのをやることにしようよ。」と云った調子です。

また、他人が氏を侮蔑ぶべつした折など、傍はたから、

「あなたはあんなに侮蔑わがされても分らないのですか。」など齒がゆがっても、

「分つて居るさ、だけど向うむこがいくらこつちを侮蔑むじしたつて、こつちの風袋ふうたいは減りも殖ふえもしやしないからな。」と、平氣に見えます。

また、男女間の妬情とじょうに氏は殆ど白痴はくちかと思われくらる位らいです。が

氏とて決して其を全然感じないのではない相ですが、それに就いて懸命になる先に氏は対者に許容を持ち得るとのことです。一面から云えば氏はあまり女性に哀惜を感じず、男女間の痴情をひどく面倒がることに於て、まったく珍らしい程の性格だと云えましよう。それ故か、少青年期間に於ける氏は、かなりな美貌の持主であつたにかかわらず、単に肉欲の対象以上あまり女性との深い恋愛関係などは持たなかつた相です。熱烈な恋愛から成つた様に噂される氏の結婚の内容なども、実は、氏の妻が女性としてよりは、寧ろ「人」として氏のその時代の観賞にない、また彼女との或不思議な因縁あつて偶然成つたに過ぎないと思われます。

「女の宜い処を味わうには、それ以上の厭な処を多く嘗めなければならぬ。」とは、女の価値をあまりみとめない氏の持説です。氏は近来女の中でも殊に日本の芸者及びそうした趣味の女を嫌う様です。

音楽なども長唄をのぞいては、むしろ日本のものより傑れた西洋音楽を好みます。

席亭へも以前は小さんなど好きでよく行きましたが、近頃は少しも参りません。芝居は仕事の関係上、月に二つ三つはかかれません。男優では、仁左衛門と鴈次郎が好きな様です。

氏は家庭にあつて、私憤を露骨に洩らしたり、私情の為に怒つて家族に当つたりしません。その点から見て、氏は自分を支配す

ることの出来る理性家であるのでしようか。たまたま家族の者に
 諫言かんげんでも加えるには、曾て夏目漱石かつ なつめ そうせき氏の評された、氏の漫画
 の特色とする「苦々しくない皮肉」の味あじわいを以もつて徐ろおもむに迫りま
 す。それがまたなまじな小言こごとなどよりどれほどか深く対者あいての弱点
 を突くのです。また氏の家庭が氏の親しい知己ちぎか友人の来訪に遇あ
 う時です、氏が氏の漫画一流の諷刺滑稽ふうし こっけいを続出風ふうはつ発させるの
 は。そんな折の氏の家庭こそ平常とは打つて変つて実かに陽気で愉ゆ
 快かいです。その間などにあつて、氏に一味ひとあじの「如才じよさいなさ」が添そ
 います。これは、決して、虚飾きよしよくや、阿諛あゆからではなくて、如い
 何なる場合にも他人に一縷いちるの逃げ路みちを与えて寛ろくつがせるだけの余
 裕を、氏の善良性が氏から分ぶん泌びつさせる自然の滋味じみに外ほかならない

のです。

氏は、金銭にもどちらかと云えばたんぱく淡泊な方でしよう。少しまとまったお金の這入はいった折など一時に大金持おおがねもちになつた様ように喜びますけど、直じきにまた、そんなものの存在も忘れ、時とすると、自分の新聞社から受ける月給の高さえ忘れて居いるといふ風ふうです。近頃、口腹こうふくが寡欲かよくになつた為ため、以前の様に濫費らんぴしません。

氏は、取り済すました花蝶かちょうなどより、妙に鈍どん重じゆうな奇形な、昆虫などに興味を持ちます。たとえば、庭の隅すみから、ちよろちよると走り出て人も居いないのに妙みょうに、ひがんで、はにかんで、あわてて引き返す、トカゲとか、重い不恰好ぶかつこうな胴体どうたいを据すえて、まじまじとして居る、ひきがえるとか。

人にしても、辞令じれいに巧たくみな智識階級ちしきの狡猾ずるさはとりませんが、小供どもや、無智むちな者などに露骨ろこつなワイルドな強欲ごうよくや姦計かんけいを見出す時、それこそ氏の、漫画的興味は活躍かつやくする様に見えます。氏の息むすこのまれに見るいたずらっ子が、悪あくたれたり、あばれたりすればする程ほど、氏は愛情あいじやうの三昧さんまいに這入ります。

氏はなかなか画えの依頼主に世話をやかせます。仕事の仕上げは、催促さいそくの頻ひん繁ぱんな方かたほど早く間に合わせる様です。催促さいそくの頻ひん繁ぱんな方ほど程、自分の画えを強きやう要ようされる方であり、自分に因縁いんねん深い方であると思きい極めて、依頼の順序などはあまり頭に這入はいらぬらしいのです。

終おわりに氏きんらいの近きんらい来らいの逸話いつわを伝えます。

氏の家へ半月程前の夕刻げんかんかせ 関稼せきぎの盗人が入りました。ふと気が付いた家人は一かじん 勢いっせいに騒ぎ立てましたが、氏は逃げ行く盗人うしろすがたの後 姿を見る位くらいにし乍ながら突立つたつたまま一步も追おうとはしませんでした。家人が詰問きつもんしますと、

氏は「だって、あれだけの冒険をしてやつと這入はいつたんだぜ、

(盗人は三重の扉とびらを手際てぎわよく明けて入りました) あれ位くらいの仕事

じゃ(盗人は作りたての外がいとう套たうに帽子をとりました。)まだ手間てま

に合うまいよ。逃がせ逃がせだ。」という調子です。氏のこの言

葉は氏のその時の心理の一部を語るものでしょうが、一いったい体たいは氏

は怖ぞくくて賊ぞくが追えなかつたのです。氏は都会きよわつ子的な上皮うわべの強が

りは大分ありますがなかなか憶おくびよう病びようでも気弱きよわでもありません。氏

が坐禪ざぜんの公案こうあんが通らなくて師に強く言われて家へ帰つて来た時の顔など、いまにも泣き出しそとう相な小児こどもの様にしよげかえ悄気返つたものです。以上不備ふび乍ながら課せられた紙数をようや漸く埋めました。

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第十四卷」冬樹社

1977（昭和52）年5月15日初版第1刷発行

初出：「中央美術」

1921（大正10）年2月号

※表題は底本では、「岡本——平《いっぺい》論」となっています。

※副題は底本では、「——親の前で祈祷《きとう》」となっています

ます。

※「椽《えん》」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年3月30日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

岡本一平論

——親の前で祈祷

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 岡本かの子
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>